

巻 頭 言

平成 28 年度の技術センター



技術センター長 山本 陽介

平成 28 年度は、技術センターの長期人員計画がスタートした年度として重要な年でしたが、ほぼ問題なく進行していると言えます。

社会にも大きく貢献した年で、特に、第 40 回全国高等学校総合文化祭の自然科学部門(7月30日～8月1日)における巡検研修が最も大きな行事でした。広島県教育委員会、広島県・広島市の高校教員、広島大学内の各部局・センターの教職員を巻き込んだ一大イベントで、技術センターは、巡検研修において中心の一つとして活躍しました。8月1日の午前、全国から集まった高校生・引率教員など 600-700 人に、学内の各施設・センターなどで見学・体験してもらいました。夏の暑い時期に広大なキャンパスを高校生に移動してもらうので、健康面が心配でしたが、無事に終了できたことは何よりでしたし、高等学校の実行委員の方々から非常に好意的な評価をいただきました。改めて、ご関係の先生方・事務の方々に厚く御礼申し上げます。

また、日本化学会の中国四国支部の主要行事の一つである、おもしろワクワク化学の世界'16 広島化学展(7月16日～18日)でも、演示に協力させていただきました。「ガラスについて学び、とんぼ玉・マドラーを作ろう」のタイトルで、こども達にガラス細工を通してものづくりを体験してもらいました。巡検研修と日程が近かったため大変だったと思います。

平成 29 年 1 月 12 日には、科学技術振興機構から有本上席フェローと中川フェローが来訪され、東広島キャンパスの N-BARD(自然科学研究支援開発センター物質科学機器分析部)、工学研究科共通機器室およびものづくりプラザを視察されました。吉田理事・副学長、大下工学研究院教授とともに、私が説明させていただいた後、有本様から多くの技術職員に質問を投げかけられ、職員は丁寧に応えていました。その後開催された経営協議会で、有本様が、広大の技術職員組織は大変素晴らしいと感想を述べられたと伺い、とてもありがたいことでした。皆様の日頃からの努力のおかげです。

最後になりましたが、教員との連携・技術職員間の連携の強化を目指して開始した技術センター研修会も平成 28 年度で 13 回目となりました。平成 29 年 3 月 15 日に学生会館で開催し、基調講演は「職場のメンタルヘルス」の講演を三宅 典恵保健管理センター講師に、また、「ジルコン年代学から読み解く原日本列島 5 億年の形成史」の講演を早坂 康隆理学研究科地球惑星システム学専攻准教授に行っていただきました。どちらも非常に有益なお話でした。大変お忙しいところご講演いただき、誠にありがとうございました。

今後も、このように連携を密にして、教職員や学生からさらに信頼される技術センターとなっていくことが非常に重要だと思っております。

「ものづくり」は「夢づくり」



広島大学附属幼稚園 副園長 中邑 恵子

♪ あったか仲間に囲まれて みんなで一緒に遊ぼう
どろんこ ままごと かくれんぼしよう
みんな大好き仲間だよ
泣いて 笑って うれしさいっぱい

一緒に生活 つくって♪ (園歌より抜粋)

広島大学附属幼稚園は、東広島市に移転してきて26年になります。今では、園舎北側の豊かな自然を最大限に活かした「森のようちえん」として、幼児教育を進めています。森では、子ども達が、全身の感覚を使って遊び、考え込んだり、チャレンジしたりしています。

幼児教育は、言うまでもなく生きていくうえで最も基盤となり将来の夢の実現を支える教育です。そして、その大切な時期を過ごす本園のキーワードは「森」「自然」。園舎内外には木のオブジェや自然素材にこだわった机やイス、掲示板等を設置しています。

昨年度末、新入園児を迎える準備をしていたところ、職員間で個人ロッカーについての心配が出ました。「ロッカーがせまくて荷物が落ちるんよね。」「木のロッカーなら、うちの園にぴったりなんだけど、価格とサイズが…」等々。4月に入園してくる子ども達の夢を収納しづらいロッカーで半減させたくないというのが職員の願いになっていました。

そこで、技術センターさんをお願いしたところ、子ども達が使いやすいサイズの木製の可動式のロッカーを製作してくださいました。年度末の多忙な時期をお願いしたので、新学期には間に合わないだろうと半ばあきらめていたので、迅速に対応して下さったことに驚きと感謝の気持ちがあふれました。そして、新学期、はりきって登園してきた子ども達は、口々に「わあ、新しい!」「ぼくのところはここだ!」と自分の棚に荷物を収め、森へ遊びに出かけます。荷物が落ちることもありません。子ども達が手で触れるであろう所は、丁寧な処理がなされています。すべすべした木の感触がダイレクトに体感できます。底には、キャスターもついていて必要な場所に一人でも移動できるのです。

技術センターさんには、これまでも戸棚等何点か製作していただいています。使用目的と設置場所にに応じて製作された「もの」には、製作に携わってくださった方の思いやりや温かさが感じられます。子ども達が、「もの」を見て、触れて、感じる生活は、幼児期の心の栄養となり夢の実現の原動力につながると思うのです。園歌の「一緒に生活 つくって♪」の大きなファクターではないでしょうか。

技術センターは、研究支援、教育支援、製品・役務提供、技術支援の目的があるそうですが、これらの目的には、「教育」と全く同様の「夢の実現支援」がしっかりと含まれていると思います。今後の技術センターの使命は、「夢づくり」。更なるプロフェッショナルとして、一人一人の、そして各組織の夢につながる技術向上と発展を心より祈念し期待しています。



技術職員の支援のあり方



技術統括 村上 義博

本報告集は技術センターの活動を学内外に広報することを目的とし、年 1 回行っている研修会での報告内容も掲載しております。例年は、研修会を夏季休暇中に開催しておりましたが、アンケート調査を行った結果、平成 28 年度は構成員が一番参加しやすい 3 月中旬に開催いたしました。なお、報告集は前号から電子媒体で発行しており、これにより写真や図表をカラーで表示できるので、よりわかりやすいものとなっています。

います。

研修会の基調講演は、最近注目されているメンタルヘルスに関して保健管理センターの三宅典恵先生にご講演いただきました。様々な環境の中で生活している我々にとって程度の差はあれストレスを抱えています。ストレスと如何につきあっていくかについて考えさせられた気がします。大学の中では決して多くはない技術職員同士が支え合うことでより良い環境で業務に携わることができればと思っています。

理学研究科の早坂康隆先生には「ジルコン年代学から読み解く原日本列島 5 億年の形成史」と題してご講演いただきました。日本各地の岩石に含まれる鉱物の年齢の測定データに基づき、アジア大陸東縁の地殻が大陸から引き離されて現在の日本列島の姿に至った過程をわかりやすく解説していただきました。

技術報告は、各部門から 1 名ずつが発表し、技術職員が日々行っている業務内容についてわかりやすい説明で、より理解を深めることができました。

今回の山本技術センター長のお話にもありましたように、本学は研究大学としてより高い目標を掲げており、研究支援を行っている技術職員への期待は大きく、様々な分野で高度な技術支援を求められています。しかし、人的資源には限りがあり、全ての要望に応えることがだんだんと難しくなっています。そこで、業務の効率化とともに、職員間の協力関係を密にして相互理解を深め、協同で種々の業務に対応しています。最新の技術に対応すべく、個々が日々研鑽し、一層信頼される技術支援組織になっていけばと思います。

最後に、ご寄稿いただいた皆様および発刊にご尽力くださいました広報ワーキンググループ委員の皆様にご挨拶申し上げます。